ほくと遺跡ものがたり
～遺跡が語る北斗の歴史～ -第12回-

はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間ここ北斗の地で営まれ続けた人類の歩み―当コーナーは、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。

今回は第11回に引き続き、箱館戦争にまつわる遺跡や記録について触れていきたいと思います。今回は大野口の戦い後、箱館戦争戊辰戦線終結から己巳戦線開戦前夜までのお話、その第1回です。

前回お話したとおり、箱館戦争は「蝦夷地への移住・開拓」という朝廷への嘆願を求める旧幕府軍使者に対する箱館府・新政府側諸藩隊による夜襲（**峠下の戦い**）により勃発し、やむなく交戦状態に陥った旧幕府軍は、統率ままならない新政府側諸藩隊を一ノ渡村～大野村村境で鎧袖一触に撃破します。これが、箱館戦争における最初の大規模戦闘である**大野口の戦い**（通称：意冨比神社の戦い）でした。

大野口の戦いと同日の明治元（1868）年10月24日、二方面進撃の一方として**七重村**（※1）方面へ兵を進めた**人見勝太郎・佐久間悌二**らの率いる部隊約250名が同村と大川村との村界で箱館府兵・大野藩・松前藩・弘前藩・福山藩からなる総勢約500名の兵と交戦。大野より向かった伝習隊の援兵も受け同日中に撃破し（**七重口の戦い**）、25日には大野口・七重口の両方面軍に加え鷲ノ木に残していた**松岡四郎次郎**率いる一聯隊ら約200名も七重に合流し、新政府側本拠である五稜郭進撃の準備を整えます。

同じ頃、函館平野側に進んだ大鳥らと別方向、海岸沿いに部隊を進めていた**土方歳三**らも川汲峠に陣した新政府部隊を退け、峠を抜き上湯の川に陣を敷きます。この連戦連敗の状況を受け、箱館府知事・**清水谷公考**は箱館府兵と、この時同城に退避していた福山藩・松前藩兵とともに24日に五稜郭を退去し箱館港より青森へ脱出。その他の藩の士卒もこれに従って25～27日にかけて青森へ脱出。

以降、新政府は公考を総督とする「新政府軍」を再編成すべく全国から青森に精鋭を集結させ、翌年の反攻のための準備を着々と整えていくこととなります。

＝＝＝

は甲冑に身を固め刀・槍・薙刀に火縄銃を手にしつつほら貝を鳴らしながら出陣していた…という話が当時を知る古老の座談会に記録として残っており、必然松前藩兵は太刀打ちできず敗れ、城中・城外に火を放ちつつ退却します。

松前藩兵を退けた土方隊は9日まで滞陣し体制を整えます。この最中の8日、松前藩主徳広の逃れた館城のある厚沢部方面へ向けて、松岡四郎次郎率いる一聯隊200名が二股口～江差へ抜ける間道を進撃。15日には50名の兵が守る館城を攻略します（この時の松前藩軍事方であった僧・**三上超順**の奮戦ぶりは敵味方ともに語り草となっています）。

同じ頃、土方隊も江差へ向けて海岸線沿いに北進、大滝での戦闘を経て13日には江差に到達する見込みでした…が、この時旧幕府軍を思わぬ悲劇が襲います。

陸軍による松前藩制圧がほぼ落着しつつあった11月11日、榎本武揚はなぜか「陸軍応援のため」海軍戦力の主力艦・**開陽**で箱館から出航、一路江差へと向かいます。当時冬だなかの日本海は大いに荒れており、松前城攻略戦に参加した**回天・蟠竜**の2艦は戦後の係留ままならず箱館へときびすを返した程でした。

開陽が江差へと到着した12日も天候は大いに荒れていました。元来江差では小型の和船であれば弁天島の陰で風雨雪をしのぐことができましたが、大型船・開陽ではそれもままならず。やむを得ず外洋に錨を2つ下ろすもその甲斐なく船は走錨を始め、蒸気機関による操船脱出を図るも間に合わず**座礁**、結果**大破・沈没**へと至ってしまったのでした（※5）。

＝＝＝